

茶屋台暮雪



飼にうゆる狐なくなる雪の日に夕日まばゆく照れる茶や台 見笑

十余り六つの花かへるさかりにはこの茶や台も如何に見ゆらむ 同

右左り富士も筑波も白妙にあかぬ詠めや茶や台のくれ 帰馬

白妙のふること同わん人も無し淋しながめや茶や台のくれ 本也

遠見鏡二荒山のすゑかけて白雲晴るゝ茶や台の暮 本也

茶や台の雪のけしきのはえありてあかぬ詠めに日は暮にけり 同

たくれば名のみ濃くも茶や台の雪のふること同ふ人もなし 本也

往來する人さへもなく道たへて草木もうづむ茶や台の雪 一誠

くれゆけば寒さぞまさる茶や台に山と積けり雪の白砂 鴛樂

野も山も真白となりて茶や台のけしきはへある雪の夕ぐれ 系丸

かたるべき人さへもなしふる雪に思ひもうづむ茶や台の暮 同

くるゝまでひねもす雪のふりつみて茶や台の名はうづみはてけり 同

風かよふ茶やのうてなに見渡せば寒さ身にしむ雪の夕暮 花友

白妙にふりうづみたる夕暮は木の芽もわかぬ茶や台の雪 陰行

思ひきや窓にあつめてふみ見しを茶や台の雪の歌よまんどは 同

茶や台の雪の夕ぐれ見渡せば二荒山につづく白妙 帰馬

見るかぎり見渡す限り白妙につみにつみたる茶や台の雪 春成